

学位審査報告書

新制

人

111

(ふりがな)	よしずみ みほ
氏 名	吉住 美保
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 455 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 共生人間学専攻
(学位論文題目)	
The Frontal Systems Behavior Scale 前頭葉機能に関する行動評価尺度の日本語版の開発と応用 ー統合失調症における社会行動障害に関する病識	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 大東 祥孝 副査 教授 船橋 新太郎 副査 教授 齋木 潤 副査 准教授 村井 俊哉

人間・環境学研究科

(論文内容の要旨)

本論文は、大きく二つの部分から構成されている。一つはGrace らによって開発された前頭葉機能に関する行動評価尺度(The Frontal Systems Behavior Scale: FrSBe)の日本語版の作成と標準化、妥当性の検討を行った研究結果であり、主として第1章において述べられている。今ひとつは、標準化されたFrSBeを用いて、統合失調症における社会行動障害に関する病識のありかたについて検討している研究であり、これは第2章にまとめられている。

前頭葉症状の臨床的な把握は、従来、包括的に述べられることが一般的であったが、Cummings らによって、これを臨床解剖学的に三つの下位群に分類することが提唱された。それによると、前頭葉症状は、(1)遂行機能障害(背外側前頭前野損傷)、(2)脱抑制(前頭葉眼窩面損傷)、(3)発動性低下ないしアパシー(前頭葉内側面前部帯状回損傷)の3カテゴリーに区分され、それぞれの前頭葉の部位を含む皮質・皮質下回路の損傷が関与している、とされる。この三区分は、以後おおむね支持されてきているが、これにそった前頭葉症状の系統的な検査法のひとつが、Grace らによって開発されたFrSBeである。これは、上記三区分に基づいた臨床症状の行動面の特徴を46項目にまとめた質問紙法である。これを、本人と家族(ないし医療スタッフ)に別個に行ってもらい、その結果から、前頭葉症状の評価を試みることになる。アパシー評価項目14、脱抑制評価項目15、遂行機能障害評価項目17から構成されており、その臨床的有用性に関して、欧米ではすでに高い評価を得ているが、日本では、その標準化がなされていなかったために、適切な使用が困難であった。

そこで申請者は、本邦の健常被験者528名、前頭葉症状を示す頭部外傷患者10名を対象として、この検査の標準化を行い、FrSBeの日本語版の作成を試みた。その結果、原版FrSBeと同様に、年齢、性、教育年数のいずれもが、遂行機能障害、脱抑制、アパシーの3下位尺度得点に影響することが示され、また、再検査を行えた32例において再検査信頼性が確認された。さらに、前頭葉損傷患者群では、各下位尺度得点において健常群と有意な差がみとめられ、FrSBe日本語版が、前頭葉機能障害に関する行動評価尺度として妥当であることが確認された。

このようにしてその妥当性の確認されたFrSBe日本語版を使用して、筆者らは、慢性期の統合失調症患者の、社会行動障害に対する病識についての検討を行った。統合失調症において病識の欠如がみられることは従来からしばしば指摘されてきたが、そこで想定されている病識というのは、原則として、自身の精神症状に対する病理性についての気づきのなさ、ということであったが、今回行われた病識の有無についての

(論文内容の要旨)

検討は、精神症状そのものに対する病識ではなく、患者が示す社会行動障害に自身がどの程度気づいているか、という水準における病識である。統合失調症患者においてその行動論的・認知機能論的障害の様相から、これまで、前頭葉機能障害の存在が示唆されてきたという事実をふまえ、筆者らは、FrSBe の自己評価得点と観察者評価得点とを比較することによって、慢性期の統合失調症患者における社会行動障害に関する病識を調査した。

対象とした統合失調症患者 (DSM-IVにより診断された外来通院中の慢性期統合失調症) は26名である。得られた結果は、次の三点にまとめられる。(1)統合失調症患者では、社会行動に関する主要な3領域 (遂行機能障害、脱抑制、アパシー) において、問題がみられた。(2)自己評価と観察者評価の差によって測定される病識は、統合失調症患者では一様に障害されているのではなく、推定IQとの交互作用がみられ、統合失調症患者を高IQ群と低IQ群の2群に分けてみると、高IQ群では自己の病態を実際よりも高く見積もる傾向がみられたのに対し、低IQ群では自己の病態を実際よりもより軽く見積もる傾向が見られた。(3)発症前の行動障害について、現時点で回顧的に評価した場合においても、(2)と同じような気づきのパターンがみとめられた。

以上の結果から申請者は、統合失調症患者の社会行動障害に対する病識は、IQに反映されるようななんらかの認知機能障害に影響される可能性のあること、および、この手法による社会行動障害における病識は、発症前の社会行動障害についての気づきを回顧的に推定する際にも適応しうることを主張している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文には、二つの研究成果が含まれている。ひとつは、欧米圏でその有用性が指摘されている、前頭葉機能に関する行動評価尺度(The Frontal Systems Behavior Scale:FrSBe)の日本語版を作成し、これを標準化して、その妥当性の検討を行った研究であり、今ひとつは、妥当性の確認された日本語版 FrSBe を使用して、従来から多くの議論のあった、統合失調症の病識を、社会行動論的水準において調査した研究である。

まず前者についてみると、前頭葉機能の神経心理学的検査法はすでにいくつかあって、その日本語版もすでに作成されていて、日常臨床に応用されているのであるが、前頭葉症状というのは、心理検査室での神経心理学的検査のみではなかなか十分に把握しきることができず、とりわけ社会行動面において生じるさまざまな問題を直接的に評価することは、これまで相当に困難なことであるとみなされてきた。

たとえば脱抑制行動に関しては、社会的逸脱行動の出現を神経心理学的検査のみから予測することはほとんど困難であり、なんらかの客観的指標が必要であることが指摘されてきたし、同様のことは、アパシー(意欲障害)や遂行機能障害(自身の行動を臨機応変かつ適切にコントロールすること)についても、程度の差はあれ、社会行動障害として評価・予測することの難しさが強調されてきた。

FrSBe は、この点を克服するひとつの方向を提起した検査法として大きく注目されているのであるが、欧米と日本での社会状況・文化的背景などを考慮すると、これを、そのまま日本でも適用できるか否かについては不明であったために、使用が躊躇されてきた。申請者は、これを多数の健常者(528名)と頭部外傷患者において行い、標準化の作業を行ったうえで、その再現性と妥当性を確認し、日本語版 FrSBe が日本でも使用に耐える有用な検査であることを確認しえた。これによって、全国的に需要の高い、とりわけ頭部外傷後遺症例における社会行動面での評価を、この検査を用いて客観的に行うことが可能となった。これは画期的なことであり、実際、当該日本語版が公表されて以降、多くの施設から利用についての問い合わせがきており、今後、社会的にも大きな貢献をなすことが期待される。

次に、後者の、統合失調症の病識についての研究であるが、病識の問題はとりわけ統合失調症においてきわめて重要な問題であるという認識のもとに、さまざまな研究が発表されてきたが、その多くは、自身の精神症状(幻覚や妄想、滅裂思考、作為体験など)についての検討が主流であって、相応の成果が得られてはいたが、これをどのように社会行動面の治療に援用するかということになると、なお、かなりの距離があるという印象は否めなかった。

申請者が今回行った研究は、FrSBe という、社会行動面での変化、障害を記述的に、自己と観察者とにおいて行うものであるもので、得られた結果は、直接に社会行動面での関与の仕方に反映される可能性を有しており、これまでの病識研究とは異なった、

新たな側面が抽出されることが期待される。

実際、今回の研究のもっとも評価されるべき点は、統合失調症患者においてその行動論的・認知機能論的な様相から、社会行動に関する主要な3領域（遂行機能障害、脱抑制、アパシー）において、有意に大きな問題がみられたことを明らかにした点ではないか、と考えられる。FrSBEにおける、自己評価と観察者評価の差に着目して、社会行動障害に対する病識とみなす、という考え方は、これまでの統合失調症の病識研究にはみられなかったものであり、独創性の高いものとして評価できる。

さらに、統計的解析から、高IQ群では自己の病態を実際よりも高く見積もる傾向や、低IQ群では自己の病態を実際よりもより軽く見積もる傾向を見出した点、さらには、発症前の行動障害について現時点で回顧的に評価した場合においても、同様の傾向を見出した点については、その解釈はさておくとしても、事実としてきわめて興味深いものであり、今後の立ち入った研究が期待されるところである。

このように、本論文は、社会的にもきわめて有用なFrSBeの日本語版を開発したことや、これを統合失調症の病識研究に援用することによって、これまでの病識とは異なった次元の、社会行動障害に対する自己認知のあり方を抽出することに成功しており、今後、さまざまな精神疾患解明への援用を含む、新たな研究方法を提起したものとして貴重であり、本学位申請論文は、人間とその社会とを、環境との関わりにそって究明することをめざした、人間・環境学の理念に適ったものと言える。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について諮問を行った結果、合格と認めた。